

---

# 悪魔の作ったゲーム

偽屋

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

悪魔の作ったゲーム

### 【Nコード】

N3430D

### 【作者名】

偽屋

### 【あらすじ】

悪魔は居た。この世に存在をしていた。悪魔は恐怖で染まっていた。あたしたちをその恐怖で包み込もうとしている。それは、ひとつのゲームだ。悪魔が作った、悲しみと残酷さをあらわしたゲーム…。あたしたちは、そのゲームに勝つことは、できるのでしょうか。

## プログラム：0   へプロローグ（前書き）

この小説は、最初のほうは大丈夫なのですが、後のほうからだんだんとグロテスクになっていくかと思われます。

その場合は、あまり無理をしてみないほうがよろしいかとおもいますので…。

## プログラム：0 《プロローグ》

あたしたちは仲間だ。

ひとつのゲームから、

必然的に作られた仲間だ。

悪魔の作ったゲームは、

残酷で悲惨なシナリオを物語っていた。

それはとても怖かった。

でも、あたしたちは笑い合えたから…

こんなに辛いゲームの中でも

一緒に笑い合えることができたから…。

とても心強かった。

仲間っていいとおもえた。

だけどあんな、

あんな酷い仕打ちがなければ…。

悪魔は酷い。

どうして

こんなことをしなくてはいけないのか。

どうして

自らを傷つけてでも

人を貶めようとするのか。

あたしには

一生わかりやしないものだ。

\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*

\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*

文字数が少ないため

こちらで軽く自己紹介をさせていただきます。

どうもはじめまして

偽屋と申します。

この小説は

私の最初に投稿することになった小説でございます。

この小説の内容は

…言ってしまったてはお楽しみになりませんね。

みなさまが

興味を抱ける

小説になれば良いと

私は思っております。

どうぞこれからもよろしくお願いいたします。

偽屋




## プログラム：Ⅰ へいつもと同じはずの登校

「おはよっ まごゆき 雅之！」

朝っぱらからハイテンションで、幼馴染の名前を呼ぶあたし、  
さかづらかなで坂浦奏。ふつつゝの家庭で育った、ふつつゝの女子高生。

一つ縛りで活発（暴力的）な女らしい。

そういうなら、元気のあるいい子だといってほしいんだけどね。

まあでも、運動はいい成績とってるけどね。

あ、勉強はダメです。

無理です。

馬鹿なんです。

すいません。

…ぶっちゃけますけど、今学期の期末、全部平均より下。

（おかげで母さんの雷が落ちた。）

他はとくに普通の子と変わり無い。

だからつまんない、なんて思ったりする。

「おはよ。奏。」

雅之は素っ気無く手を振る。

こいつもつまんないやつだ。

無表情で思ってることがいまいちわかんなくて、面白くない。

でも頭は良いし、足も速い。

(ムカツクほど毒舌でもある。)

「昨日B組の女子に告られたんでしょ？」

アツハハ と笑って雅之の肩に手を乗せる。

雅之はこんなに無表情で面白みの無いやつなのに、なぜかモテる。

あたしも女子だけど、雅之がかっこいいなんて思ったこと、一度も無い。

あたしの好みのタイプとはまったく違う。

雅之はあたしの手をゆっくりと外して

呟くように言った。

「そっぴえばそうだった。」

…これを昨日の子が聞いてたら泣くよなあ…。

女心のわかんない男子生徒めっ！！

あたしは深いため息を吐く。

「ため息はやめてよ。空気が濁る。」

…おいこら。どういう意味で言ってる？

「B組の子のためのため息ですから。」

ヘツと笑ったあたしを無視して、

雅之はささっと前に進んでいた。

「はやっ！」

雅之は普通の歩く速さも速い。

アタシが普通に歩いてたら全然追いつけない。

「ちょっと！あたしの速さに合わせてよっ！疲れるでしょ！！」

早歩きで息を切らしながらあたしは言った。

そんなあたしとは正反対に、

ふつつの顔をして雅之は言った。

「だったら着いて来なきゃいいじゃん。一人で歩いて来れば？  
ニヤツと笑う雅之。

…ック！！

この勝ち誇ったこいつの顔がうざりたい！！

「万が一あたしが変質者に出会ったらどうすんの？！」

目をウルツとさせて演技してみたあたしに、

雅之はわざとか気にしていないのか

あたしに聞こえる声ですっぱり言う。

「変質者が可哀想になるね。」

「つるさい！！」

言われた瞬時に蹴りを一発雅之にかます。

雅之の腰に当たって、雅之は少しペースダウン！！

あたしの普段の歩く速さになった。

「本当のこと言っただけじゃん。いちいち蹴るなよ。」  
腰をさすりながら歩く雅之に即答。

「女心のわからないあんたがそんなこと言っちゃいけないの！」  
ふん！とそっぽを向いてあたしは頬を膨らます。



なんだか背筋がゾツとしたのを感じたけど、  
気にもしなかった。

でも、

これがあたしたちの最初の警告だったんだ。

だって、

学校の中に入ったせいで

あたしたちはゲームをすることになったんだもの。

悪魔の作った

この最高最悪の

自分の命をかけたゲームを。

## プログラム：2 〈白い紙に赤い絵の具〉

「あれ？なんで今日はこんなにも静かなの？」

最初に校舎に入って不自然なことに気がついたのはあたしだった。

どう考えてもおかしかった。

いつもは響いている先生の声も、

鬼のような先生から逃げる男子生徒たちの声も、  
今日は寂しいことに聞こえてはこなかったのだ。

「きよ、きよう休みじゃなかったよね？！」

焦りながら聞くあたしに、雅之は一言言った。

「うん。」

…なんか、とても家に帰りたくなってきた…。

なんか怖くなったあたしは、

同じクラスの親友、由樹<sup>ゆき</sup>の下駄箱を覗いた。

「あ、ある…」

由樹の外履きは確かにあった。

少しだけ安心したけど、やっぱり怖かった。

「由樹っ！おっはよう〜！！」

なるべく明るめに振舞<sup>ふるま</sup>って、あたしは教室に入った。

雅之は静かにあたしに続いて入ってきた。

「あ、奏……。おはよ……」

由樹の声はすぐに消えていった。

なんだか、不安が増した感じがする。

「ど、どうしたの？由樹っ！そんな暗い顔して！！」

ニコニコと作り笑いするあたしも、

そろそろ限界を達していた。

教室には、あたしと、由樹と、雅之と、

他男子6名と女子4名がいた。

クラスの半分もいない……。

みんな浮かない表情をしていた。

「朝きたら、こ、こんな手紙が……」

由樹は青ざめた表情をして、あたしに一枚の手紙を渡した。

その手紙は、

白い封筒に無理矢理赤い色の絵の具を塗ったような、

気味の悪い赤い色をしていた。

あまり触りたくは無かったのだが、頑張って封筒を静かに開いた。

そして、一つの手紙を出した。

その手紙も、

白に赤が塗らされていた紙だった。



その手紙には、こんなことが書かれていたのだった。

プログラム：3 《恐怖のゲームの参加状》

『初めまして。

私は悪魔。

歯車が壊れた狂われし

悪魔です。

選ばれしキミたちには

私のパーティーに参加していただきました。

パーティーといっても

私の作った

ゲームなのですがね。

内容は簡単です。

キミたちには

8時から4時間経過した12時から

隠れ鬼をしてもらいたいと思います。

私がこの学校の中にばらまいた鬼に

逃げてもらいたいです。

隠れながら動いてもよし、

鬼に見つかっても逃げればよし。

要は鬼に捕まらなければいいのです。

鬼から逃げ切って、

そして

この学校のどこかに隠れている私を見つけ出せたら

キミたちの勝ちです。

そして、

鬼に捕まってしまった人は…

残念ながら、

もうこの地面に立つことは無いでしょう。

それから重要な説明を少しほど…。

1 隠れる場所は学校内。

そこから出てしまった場合は、  
やはりこの地面に戻ることはできません。

2 学校内ならば何処に隠れてもOK。

3 鬼は人型なので、  
普通の人と見分けがつかないけれど、  
人とは違うところが多少あります。  
それを見つけ、鬼に言うように叫ぶと、  
反対に鬼を退治することができます。

4 鬼は全体で15体います。

5 このゲームに参加している人数は、約50名です。

さあ、

それではキミたちの命をかけたゲーム

頑張っ

逃げ切ってください。

健闘を祈ります。』

…以上が悪魔の書き残したメッセージ。

あたしたちは、  
知らぬうちに  
悪魔の作ったゲームに参加させられていた。

なんだって言うの?!  
これ…。

あたしは何も言えなくなった。  
足が震えてる。

強気になれなかった。  
雅之は平然を装っていたけど、  
瞳の奥がわずかに震えていたのにあたしは気付いた。

怖かった。

何も言えなくなるような  
恐怖に

あたしたちは押しつぶされそうになったのだった…。



プログラム：4    〈僕は血の繋がってない兄弟みたいだね〉

「こ、この手紙は…いつ見つけたの…？」

震えた唇が開いてやっとな声がでてきた。

でも、その声は小さくて、震えていた。

「俺が教室の教卓で見つけた…」

一人の男子が小さく手をあげていった。

あいつはたしか、

いつも教室に一番に来るやつ。

あの、必ずクラスに一人はいる目立たないやつ。

でも、良くみたらかつこいい顔が多いんだよ。

だって、こいつだってそうだし。

名前は金沢春人。  
かねざわはると

机には必ず分厚い本が置いてある席が、春人の席だと覚えていた。

それと、実はこいつ、

雅之の親友なんだ。

結構合うコンビみたいだけどね。

「うーん…誰かの悪戯かなあ？」



少し明るい声が聞こえた。

その声の男は吉島尚人<sup>よしじまなおと</sup>。

普段はかなり明るい、

正直言つとウザイ奴だ。

髪は寝癖みたいな髪型で

ボウボウしていて

（本人はファッションだつて言ってるけど）

金髪に近い色。

先生達のブラックリストに

絶対入っていきそうな人物である。

「尚人、この言葉を知ってる？聞いて極楽見て地獄。

聞いてるだけじゃあなんだか楽に思えるけど、

実際には地獄のようなものなんだつて言うこと。」

この声は双子の妹、井上ノゾミ<sup>いのうえ</sup>。

成績優秀。学年2位を誇る、

頭のいい黒髪のかっこいい女の子。

「やだなあ、尚人がそんな言葉を知ってるわけ無いじゃないか。ノゾミ。」

尚人にはこう言ったほうが分かりやすいよ。

いいかい尚人、

もしこれが尚人のやっているゲームだとすれば、

尚人は一番最初に殺されるキャラクターってことだよ。」

この声は双子の兄、井上ノゾム。  
こちらも成績優秀。

学年1位を誇っている。

頭のいい同じく黒髪の毒舌の男の子。

「つるせえっ!!」

仲の悪いようにみえるこの3人、  
実は大の仲良し。

親友だ。

ホント性格が合う、こいつら。

ぜんぜん住んでる世界が違うように見えるのに…。

そんな笑いを出していたこいつらの瞳も、  
やっぱり恐怖でわずかに震えていた。

あたしって、

変なところで観察力がすごいって言われてるんだけど、  
こういうことかあ。

きつとこいつらは、怖いのを誤魔化そうとしてるんだ。  
だから互いに笑い合おうとしてる。

あたしにはそんなことしか分かんなかった。

知らないうちに、

震えが止まらない手で

雅之の制服の袖を掴んでいた。

雅之はちらりとあたしを見て、

微かに苦笑した

…ように見えた。

でも、

それがとても温かく感じられた…。

## プログラム：5    〈互いを安心させる、思いやり〉

「…いまは9時…。ゲームが始まるまであと3時間…。」  
震えた声を振り絞って、畑山由樹は呟いた。  
はたけやまゆき

由樹はいつもは明るいはずのあたしの親友。  
いまの由樹は、  
まるで別人のように思えた。

「他のクラスにも、この封筒は置いてあったみたいだ。  
ちよつと気になるのが、他のクラスの封筒は、  
こんな風に赤くは無かった。」

手紙のほうは赤かったみたいだけど。」  
ピラリと他のクラスから拝借してきた封筒を、山中結城は出した。  
やまなかゆうき

彼は学校一の情報網人物。知らない情報は無いとかの話…。

…いままで気にもしてなかったけど、  
良く考えたらうちのクラスってすごい人ばっかいるんだね…。

今ごろ気づくあたしって、なんか鈍すぎかもしれないわ…。

「…内容は同じですう。」まったりした口調で松本静香は言った。  
まつもとしずか  
静香ちゃんは、クラスの和みマスコットで、いろんな意味で人気者。

結城の彼女って噂があるらしいけど…。そーゆーのはあたしはあんまし気にしないほうだ。

「うわっ！まじかよ。俺らのほかにも参加させられたのかよっ！」

この男っぽい口調は、やなぎだみとみ柳田美富。

性別上では女であるが、喧嘩っ早い。

男気のある姉御肌あねごはだな子だ。

彼女の大きいリアクションと大きな声に、  
あたしたちは数秒ばかりとして口を開けていた。

しかし一人、

カッカツと美富に向けて笑っていた人物がいた。

「はっはっは！柳田、

お前こんな状況でもリアクションでけえの！！

少しは女らしくしろってえ」

こいつもかなり声がでかい。

あたしの耳がどうにかなりそうで、  
いろんな意味で怖い。

この声の主は、みづきま佐々木抹。

美富の幼馴染で、

とても陽気で明るい性格（吉島とは違う意味で明るいのだ！）

身体はでかくせに、喧嘩はあんまししたくないんだって。

（平和第一主義者らしい…。）

だから、毎回美富の喧嘩を止めるのは、

図体のでかい幼馴染のこいつなのだ。

「るせーよ。デカマツ。」

ムツとして美富は佐々木に言い返してきた。

あたしは今ごろ気がついた。

学校の中に閉じ込められた奴らみんな、  
みんなこのゲームを怖がってるんだ。

だから、

だから互いに安心させようと無理して明るい話をしているんだ。

あたしはぜんぜん分からなかった。

あたし馬鹿すぎだよ。

何でこんなにも簡単で、

一番重要なものに気がつかなかったの？

まるで、あたしが悪魔みたいで  
嫌な気分になっちゃうよ…。

あたしは一人、

心の中でひっそりとうなだれた。

## プログラム：6 〈壊すのがすきなんだね？〉

「ねえ、あと少ししか時間が無いでしょう？急いで隠れる場所を決めないと……。」

だんまりした空気のなかに、学年委員長の宮坂ハルナみやさかが割り込んできた。

宮坂さんはとてもリーダーシップな人で、

皆をまとめるのには最適だ、ということで学年委員長に推薦され、立候補者の多い中、見事学年委員長になった。

いつも沈着冷静れいせいちんちやくな彼女も、やはり声が震えていた。

それほど怖いのだ。

このゲームは。



きつと人を恐怖にさせることが好きなんだ。

悪魔は。

あたしは負けたくないと思った。

そんな悪魔になんか

負けてたまるか！

…そう、思った。

「でも何処に隠れるっているんだよ！」  
ちよつと怒れ気味の坂野翔太さかのしょうたの声にふと我に返った。

いつもは似合う黒ぶち眼鏡も、  
今回だけは壊れたように似合うことが無かった。

「そんなの、自分で見つけなきゃ意味ないでしょ？！  
それともなに？あなた一番最初にここからいなくなりたいわけ？  
?!」

とうとう宮坂さんも限度を超えてしまったようだ。  
二人は言い争いを続ける。

「そんな風には言っていないだろ？！  
こんな何処にでもある学校の何処に、隠れる場所があるんだって聞  
いてるんだよっつー！！」

「知らないわよそんなの！！自分で探したらどうっ？！」  
いつもは冷静でクールな二人は、今日は全部それが乱れていた。

「つるせえよ！」

探す以前に隠れるとこなんてないつつつてんだよっ！！」  
ああもう……。誰かとめてよおお……。

「なかつたらこんなものこないわよっ！！」  
宮坂さんは赤い封筒を坂野の前に突き出す。

「何だよお前、そんなもの本気で信じてんのかっ？！  
はっ！学年委員長も意外と女々<sup>めめ</sup>しいもんだねえっ！！  
俺は信じねえよこんなもん！！  
俺が嘘だつて教えてやるよっ！こんな手紙っ！！」  
そう言つて坂野は走り出した。  
似合わなくなつた黒ぶち眼鏡をかけて……。

「ちょ、ちよつと待てよ坂野っ！！」

坂野の親友の結城は、慌てて坂野を呼び止めたが、  
坂野の耳には結城の言葉は入らなかつたみたいだ。

坂野は後ろを振り向かず、素早く校舎のほうへ走つていった。

「待てつて坂野っ！！」

結城は焦つて坂野の後を追いかけた。

その後に、静香ちゃん、美富、佐々木……  
とあたしのクラスの全員が坂野と結城の後を追つていった。

もちろん、いままで怒鳴り声を上げていた宮坂さんも…

プログラム：7 《ルールに従え》（前書き）

ここから悲しくなってくるかも知れないです…。

## プログラム：7 《ルールに従え》

「おいっ！何する気だよ坂野っ！！」

あたしたちが校舎についたときに、結城の焦った声を聞いた。

「だから言っただろっ？！俺が証明してやるっ！！こんなものっ！！」

坂野は封筒をピラリと見せて、そして狂ったように叫びだした。

「俺はゲームなんてしてやるもんかっ！！  
俺は帰りたい！帰りたいんだよおおっっ！！」  
叫びに叫んで坂野は校舎を開けた。

…そう。開けてしまったのだ。

ルールを、

破った…。

校舎の扉を開けたとたん、

坂野の身体は炎に包まれた。

「ああああああああああっっっ！！！！！！」

坂野は恐ろしいほどの恐怖に負けて、大きく声を張り上げた。

悪魔だ。

悪魔の仕業だ。

悪魔は本当にいた。

あたしたちは、この目で見てしまった。  
坂野の燃える姿を。

あたしたちは目を大きくした。

結城は魂を抜き取られたかのように目を広げて、  
ポカンと立ち尽くしていた。



「あああああ…?!?!?!」  
坂野の声は途切れた。  
力なく途切れた。

悪魔に殺された。

悪魔を拒んだ坂野を、悪魔が殺しにやってきたのだ。

ゲームの恐ろしさを、  
あたしたちは今ごろ知ることになってしまった…。

恐怖がこみ上げてくる。  
怖い、怖い…。

どうして？

どうしてこんなことをするの？

やめてよ…やめてよ…。

どうしてそんなに残酷なんだい？

悪魔。

悪魔。

お前は人を殺すためにいるのか？

あたしたちを試すためにいるのか？

ただ単に遊んでいるだけなのか？

そんなの、  
許せない…。

人を殺す必要はあるか？！

悪魔を拒んだ人間を

何故悲しく燃やすんだ。



ピラリッ…。

あたしの足元に黒く燃えた封筒が落ちてきた。

あたしがそれを軽くつまんで顔のほうへとやると、

『サカノシヨウタ・ゲームオーバー』

と、黒くなった封筒の表に燃えてない部分でこう書かれていた。

坂野は燃えた。

坂野は

悪魔に殺された。

いまあたしたちの前には  
炭になった坂野と、

坂野の似合わなくなつた黒ぶち眼鏡が

僅かな音を立てて転がっていた。



プログラム：8    〈嗚呼・・・可哀想な乞食〉

「坂野、坂野、坂野…」

眼鏡が転がった音で我に返った結城は、  
涙を頬に伝わせながら炭なった親友の名を呼んだ。

しかし、炭になった親友から声が返ってくることは、  
二度となくなったのだった。

「どうして…？どうしてなんだよっおお！！」

結城は坂野の黒ぶち眼鏡を手にとって叫んだ。

その光景を、あたしたちはただ悲しそうに見つめているしかなかった…。



フ  
フ  
フ  
ッ  
…  
。

かわいそう  
可哀想な結城。

僕たちがかけてあげる言葉なんて、  
今の結城には同情にしか聞こえないね…。

親友が炭になった。

さあ、どうして？

どうして？

さあ、どうしてだろうね。

悪魔は自分を拒んだ坂野に憎しみを覚えたのでは？

悪魔は坂野を恨み

そして、

燃やした。

彼の命を。

嗚呼、可哀想な坂野。

嗚呼、健気な結城。

親友は炭になってしまったよ。  
もう戻っては来ないんだよ。

いったい彼はどんな気持ちなのだろう。

苦しい？

痛い？

悲しい？

そんな軽いものじゃないでしょう？

もっと、

もっと辛い…

酷く怯えたキモチ。

結城、きみはツイてるね。

次はきみかも。

だって悪魔を拒むんだろっ？

そんなの、僕は許さないよ。

僕を拒んだら

死が待っている

結城

きみは

悪魔を拒むか

死を選ぶか…

このゲームに勝つか…

その三択しかないよう。

もしこのゲームをするのだとしたら



き  
み  
は

たぶんマケル



プログラム：8    〈嗚呼・・・可哀想な乞食〉（後書き）

悪魔：それはいったい何者なのか…。

プログラム：9    〈狂わせてはいけないよ、悪魔。〉

「さ、さか、坂野が…坂野がああああ…!!!」

結城は目を赤くして、坂野の眼鏡を強く握り締めていた。

「じ、ごめんなさいっ!!」

わ、わたしが坂野君と些<sup>ち</sup>細な喧嘩を始めてしまったせいでええっ!

「」

宮坂さんは頭を抱えて泣き叫びながら謝った。

結城はそんな宮坂さんの言葉を耳に入れることなく呟いた。

「…やる…」

その言葉は小さくて、

宮坂さんは涙が流れている目をパツチリと開けて聞いた。

「…え？」

宮坂さんは普段目が細いほうだけど、

いまの宮坂さんの瞳は大きく開いていた。

「…勝つてやる…。悪魔が坂野を殺した…。

ぜってえ悪魔に勝つてやる…!!」

結城は普段の正気を失っていた。

いまの結城は、ただ悪魔に勝たなくてはいけないという言葉が、  
頭の中を駆（めく）け一巡っているのだ。

「ゆ、ゆうちゃん…？ど、どうした、の…？」  
身体をガタガタ震わせて、静香ちゃんは結城の名を呼んだ。

「あ…」

静香ちゃんの小さな声でハッと我に返った結城は、  
膝をペタンと床につけて、静香ちゃんよりも、この場にいる誰よりも、  
身体を大きく震わせてブツブツと呟いた。

「…あ、あゝあ…。や、やめ…！！い、いやだ…なん…で…？」  
結城は誰かに問い掛けているかのように呟いて、そして

「…どうして…坂野を…。」  
結城はさっきまで泣いていた涙をまた流した。  
その涙は、何故か濁って見えた。



「ゆうちゃん。」

静香ちゃんは結城を心配そうに見つめて、  
そしてゆつくりと保健室の方へ連れて行った。



「わ、わた、わたしのせい……ごめ、ごめんなさい……っ……!」  
あたしたちは教室に戻った。

宮坂さんはその間もずっと頭を抱え込んで呟いていた。

「…いい加減にしろや。無駄な涙流してるヒマあるんなら、隠れ場所探したらどうやねん。」  
急に教室に、聞き覚えのあるひとつの声が響いた。

この特徴のある下手な関西弁は…

「ひ、陽立<sup>ひたち</sup>?!」

佐々木が声を張り上げてその声の主の名を呼んだ。

「お前、さつき教室にいなかったじゃねえかつ!!」  
今度は美富が大きな声で言ってきた。

陽立こと、陽立祐介ひだちゆうすけは、なりかけ関西人ってとこ。

なんか知らないけど、関西弁がかっこいいとか言って、無理やり関西弁を使うようになっていたのだ。

こいつは普段、美富や佐々木と行動をとみにしているので、あまり評判が良いとはいえない。

だが、こいつの本性をあたしは知っている。

「さつき着いたねん。」

祐介はあたしのほうをちらりと見て視線をすぐに外した。

「いいかいな、もう俺らは袋の鼠ねずみうちゅうことや。  
逃げられることはできん。」

本来なら宮坂さんが言っていそうな言葉を、祐介はすらっと言った。

「お前、本気か？」

ゴクリと佐々木が聞いた。

「本気やなかったらこんな阿呆らしいこといわへんよ。  
俺は守りたいもんがある。」

そう言つて祐介は教室を出て行つた。

あたしたちに何かを拒絶しているような冷たい背中を見せて…。

プログラム：9    〈狂わせてはいけないよ、悪魔。〉（後書き）

一人、また一人…

狂って行く……。

次は誰が狂ってしまうのでしょうか…。

プログラム：10 〈立ち向かうの？悪魔に？〉

「…俺も隠れ場所探す。行くぞマツ。」

しばらくうなだれていた美富もそう呟いて、

心配そうな表情をする佐々木を引っ張って行った。

「馬鹿馬鹿しい…。」

ポツリとノゾムは言った。

「でも死ぬよりはマシじゃない？」

ノゾミもポツリと言った。



「じゃあ俺らも行こうぜ」…。」  
吉島もポツリと言った。

三人は静かに立って、教室を出て行った。

みんな動いた。

悪魔のゲームに勝つために。

そりゃそうだ。

こんな残酷なゲームなんかに  
悪魔の遊びなんか  
負けたくはないもの。

みんな、  
動き出したんだ。

悪魔を見つけ出すために。



「…奏、アタシたちも隠れよう?!死ぬなんていやっ!!」  
由樹は今にも叫びそうな声を張り上げて言った。

「うん…。雅之はどうするの…?」

「もちろん、隠れるよ。」

雅之は、あたしたちの視線を弾いているような感じに後ろを向いたまま、

こちらに振り向いてはくれなかった。

「宮坂さん…?宮坂さん…!!」

あたしは必死に宮坂さんの名前を呼んだ。

でも、宮坂さんがあたしの声に気づいてくれる気配はなかった。

「ごめ、ごめんなさつ…!!」

宮坂さんは精神的にボロボロになった様子だった。

ただ頭を抱えて、そして涙を流していただけ…。

「春人も隠れるだろう?」

雅之の声に、春人は…

「うん。でも…宮坂さんを一人で居させるわけにはいかないから…。」

春人は軽く苦笑して雅之に向かって言った。

「…そうか…じゃあ、早く隠れるよ…。」

雅之の声は、いつもより元気がない。

なんだか聞いているこっちが寂しくなってしまう感じがしない。

「分かってるよ、雅之。また、後で会おう。」  
春人はそう言っで、あたしたちに苦笑してみせた。

「…うん。」  
あたしたちは教室を出た。

いまから始まる

命を賭けたゲームに立ち向かうために。



プログラム：11    〈可哀想だね・・・みんな、ミシナ・・・〉

只今の時刻 9：50・

ゲーム開始時刻まで、残り約2時間。

「ど、どこに隠ればいい?！」

由樹はさっきからこの調子。

頭の中がパニックになっている。

「とにかくっ！隠れられそうな場所を探さないといっ！」

あたしは由樹を励ますように言った。

つもりだったけど、あたし自身、焦っていた。



そりゃあそうだ。こんなゲームに巻き込まれて  
平然としていられる人なんかいやしない。

現に冷静な宮坂さんや、坂野がああなつてしまったんだ。  
あたしたちが冷静にしていられるわけがない。

「…あそこ、何やつているんだろう。」

雅之の声にあたしと由樹は我に返った。

雅之の視線を追うと、

そこには職員室に駆け込む生徒達がいっぱいた。

みんなゲームで焦っているらしい。

「どういふことですかっ?!」

「家に帰らせて〜!」

「隠れ鬼なんてできるわけが無いじゃない!!」

「勝てるわけ無いよっつ!!」

みんな泣き言を言って先生達にしがみついている。

先生も動揺を隠し切れていなかった。

「だ、大丈夫、ですっ！みなさんは必ず、先生達が守りますからっ  
！！」

先生、あまり頼りにできません…。

先生達も隠れる場所を探すのに精一杯みたいだ。

「…奏、行くよ。」

雅之が腕を引っ張ったのに気がついた。

どうやらあたしも職員室の前で止まってしまったらしい。

由樹は頭を抱えながらも、あたしと雅之の後についてきていた。

「し、ごめん。」

小さく謝って、あたしは雅之を見た。

雅之の瞳は  
とても澄んでいた。

こいつ、こんな瞳だったけ？  
よくわからないけどそんな疑問が頭を回った。

本当は、もっと大切なことが今あるのに、  
それを無視しようとしていた。

だって…怖イ ندا…。

アクマが……



プログラム：11  
〈可哀想だね・・・みんな、ミンナ・・・〉（後書き）

プログラム：12 「サア 隠レヨウ？」

「雅之は、何処に隠れるか決めたの？」

あたしの問いに、雅之は静かに首を横に振った。

「まだ。でも逃げなきゃ。」

…なんだ。

こいつなりになんか考えているのかと思った。

ちょっと期待はずれだ…って、

あたしは何考えているんだか…。

「じゃあ、あんまり人の来なさそうな所ってどこか知ってる？」  
あたしは次の質問をした。

自分で考えろって思ってるかもしれないけど、

いまのあたしに何かを考えろって言われても  
多分変なことしか思いつかない。

「…だったら…」  
ハッとして雅之は呟いた。

そしてあたしの腕を掴んでいた手を  
強く握りなおしてUターンした。

「えっ?!」  
グイッと引つ張られて、転びそうになった。  
(でも運動神経だけはいいいから、みごと態勢を整えられました。)

「ど、ど、ど、いくの?!」

「少し黙ってて。」

今度の質問には、雅之は答えてはくれなくて、ただあたしの腕を引っ張るだけだった。

雅之がこんなに頼もしく感じたのは

たぶん

今日がはじめてだと思う。



嗚呼…

酷い、酷い。

君は僕を裏切った。

隠れた僕を

探してくれなかった。

だから

今度は見ツケテ。

シンユウデシヨ???



プログラム：13 《予想外の隠れ場所》

けっこう階段を上がった。

あたしの学校は無駄に縦長らしい…

「…ここ、だ。」

少し息を荒げて、雅之は目の前のとびらを指差した。

「あ、ここ…」

あたしは驚いた。

だってこのとびらは…

女子ロッカーと男子ロッカーの入り口だったんだものッッ！！

「え、もしかして雅之が女子のほう入ってくれるの?!」  
「何故かあたしは、バラバラに入る、  
という考えが浮かんでこなかった。」

「…何バカなことやってんの、そっちじゃない。こっち。」  
「雅之はあたしを軽蔑<sup>けいべつ</sup>したような顔をして  
男子ロッカーの隣の壁に手を当てた。」

そこは小さな板が何枚も貼られてあって、  
何回も修正したように見られる。

雅之は

あたしと、まだ頭を抱えている由樹を無視して、  
小さな板の一つをはがした。

『ベリッ！！』

そんな音がして、その板の奥から冷たい風が吹いてきた。

「……？」

あたしは雅之を押して、  
板をはがしてできた穴の中を覗くように見た。

そこは、一つの教室のようだった。

決して広いとはいえないけど、  
あたしが15人入ってもスカスカな感じの教室だった。

でもなんで雅之がこんなところを？

「入って。」

雅之はあたしと由樹を押して、  
その小さな穴の中に無理やり入れた。

その穴は小さかったけど、  
何とかギリギリ入ることができた。

（詰まったら命取りだって、  
雅之に言われて自分自身で押し込んだのは、  
かなり恥ずかしい。）

「ここは俺と、春人しか知らない。」  
つまり秘密基地、みたいなものですか。



「だから、もしかしたら春人が来るかもしれない。」  
春人を心配して雅之は言った。

「いつ見つけたの？ここ。」  
冷静になったつもりであたしは聞いた。

すると雅之は、秘密基地の話題からわざとそらすように、思い出話を始めた。。。



プログラム：14 《変わっても 親友ダヨネ…??》

「…小学生のころの話なんだけどさ。

春人は、誰とも話さなくて、いつも何かを探していたんだ。だから、聞いたんだ。何を必死に探しているのか、って。

そしたら春人、友達とかくれんぼしているんだって言い出して。

正直頭が可笑しいのかなんて思った。でも春人は必死に聞いてきたんだ。」

僕の親友を知らない？

「そのときはなんかかわいそうになっちゃって、俺が親友になってやるよって言っちゃったんだ。

春人はそれがすごく嬉しいかのように顔を赤くしてさ、

ありがとう、なんて言っただ。

それからはずっと一緒だったよ、春人と。

俺も親友になれてよかったな、なんて思ってるし。

…でも最近になって…」

そこで雅之は息を詰ませた。

なにかその続きを言いたくないようだった。

「…うん。もういいよ。」

あたしは雅之の口に手を押し当てた。

真剣な眼差しで見たあたしに、

雅之は一瞬ポカンとして、そして吹き出すように笑った。

「…なんか奏、最初に会ったころの春人と似てる。」

ははっ、と笑う雅之に、

あたしは仕方なく苦笑して、そして蹴りを一発。

「なによ、あたしが暗い性格だって言うの？」  
フフフ…と不気味に笑ったあたしに、雅之は

「違う違う、春人は明るかったよ。でも最近は暗くなっちゃって、俺が理由を聞いても何でもないって言って教えてくれない。」  
軽く微笑む雅之の顔を見て、なんだかあたしはズキツときた。

なんかの病気かな…。

嫌に痛い…

プログラム：15    〈動き出すよ ゲームを楽しませてくれる〉

「ハアハア……」

息を荒げて、結城は廊下を思いっきり走っていた。

近くに静香が居る様子はない。

彼一人が廊下を走り抜けている。

（俺は勝たなきゃいけないんだ！！）

結城はパツチリと開けた目で、周りの状況を一瞬で感じ取っていた。

このゲームに巻き込まれた奴らほとんどが、このゲームを良いと思

っていないようだ。

それ以前に、信じていない。

このゲームを。

悪魔を。

俺はこの目で見たんだ。

坂野が焼け死ぬ姿を。

坂野が悪魔を拒んで、悪魔に殺された姿を。

見たくもなかった。

当たり前だ。

親友の死ぬ様を

何故見なくてはいけない？



結城は、坂野の黒ぶち眼鏡を握り締めて、つばを飲み込んだ。

俺はかたきをうつんだ。

残酷な悪魔を見つけて

問い詰めなきゃいけないことがたくさんあるんだ！！

結城はそのまま階段を上がろうとした。

だが、小さな声に、本能的に足が止まってしまった。

「ゆう…ちゃん…？」

その声は紛れもなく静香の小さな怯えた声だった。

彼女の肩が大きく揺れている。

そんなに結城の顔が怖いのだろうか。

「…しず、か…」

結城は怯えた静香の顔を見つめた。

顔がかなり青ざめていて、  
ずっと見ていると同情したくなるぐらいだった。

「探したんだよう？まだ正常じゃないのに、保健室でちゃダメだよ……。」

静香は泣きべそ声で結城にしがみついた。

「心配したんだからね……？急に静香をおいてっちゃ、やだよ……。」  
静香の瞳は、もういつ涙が零れてもおかしくない水の溜まった瞳だった。

そんな静香に我に返った結城は

「……ごめん。俺、自分を忘れていた。俺、坂野は守れなかった。  
だから、だから静香は必ず、俺が守るから。」  
そう言って、結城は優しく抱き付く静香の頭を撫でた。

静香の髪はまるで、水を触っているような感触がした。

「ゆうちゃん……！！」  
静香はパァッと笑顔を見せて、そして顔を結城の身体にうずめた。  
そして……

「アッリッ カトウッ…」  
静香の声ではない声を出した。

それに、結城は気付きもしなかった…。



プログラム：16 《イマサラ》

ねえねえ、

僕ね、親友とかくれんぼをしてるんだ。

きみ、知らない？？

僕の親友はね、とっても隠れることが上手なんだ。

石ころの下だって、机の中だって、

どこにでも隠れることができるんだ。

すごいでしょ。

僕の親友は自慢なんだ!!

え？

きみが親友になってくれるの？

ほんとう??!

ありがとう!

うれしいな!!

僕、きみみたいな子と友達になりたいって、

何度も思ったことがあったんだ！

仲良くしよう、ありがとう！

マサユキくん……。



[...]

どうやらいつの間にか寝ていたらしい。

さっきの夢、何で今ごろになって見るんだ？

もう過ぎたことが、なんで夢に出てくるんだ？

いやな夢だ…。

自分の愚かさが哀れになってくる。

「雅之？どうしたの？」

雅之はハツとした。

奏が心配している。

俺はいま、冷静でいなければいけないのに…。

「…なんでもないよ。」

奏に向かって軽く苦笑した。

「…そう？」

奏も苦笑した…

「ドコッッ!!」

と思ったら、奏は俺に裏券を極めた。

…いつてえ…。

奏は体力馬鹿で、力がいつも有り余りすぎなんだ…!!

「…なあんて嘘言ってんじゃない!少しは取り乱したって良いんだから。」

ストレス溜まるよ?まったく、こっちも気分合わせにくいんだから。」

奏は恥ずかしそうに頬を赤らめて強気に言った。

…あ、俺、何やってんだろ。

全然冷静になんかなれてないじゃん。

春人を置いてきて、奏には心配かけて、俺、いったい何したんだ？

何もしてあげてない。

そう思ったら辛くなってきた。

喉が焼けるように熱くなってくる。

何かがこみ上げて来そうだ。

「…少しは、アタシにぶつけても良いんだからね。  
まあ、内容によればカンフー使うケド。」

「奏、カンフー知らないじゃん。」  
フンツと鼻で笑ってみせると、やはり拳を顔面にぶつけられそうになった。

危ないけれど、なんとなく心が落ち着いた。

ああ、今ごろ気づいたよ。  
俺。

こうゆうのが一番俺の中では楽しいときだったんだ。

嬉しいときだったんだ。

誰かが俺を心配してくれたり、信用してくれるときが、

一番俺の中では心地良いんだ。

「……ありがとう……。」

呟いた声に、奏は耳を塞いだ。  
目も閉じていた。

それは、『いまさらなにさ。』といったふうに感じた。

春人にも会ったと言わなきゃ  
・

『ありがとうって…。』

プログラム：17   〈大丈夫   まだゲームは始まってない〉

只今の時刻10：40・ゲーム開始時刻まで残り10分。

陽立は手をジープンのポケットに突っ込んで、歩幅を小さくしていきながら思っていた。

（悪魔は何が目的なんや…）と。

悪魔はゲームが始まってすぐに坂野を燃やした。

何で燃やす必要があったのだろうか。

悪魔は俺達になにを望んでいるのだろうか。



「チツ……」

悪魔に試される……こんな屈辱、生まれて初めて感じた。

小さく舌打ちして、陽立は前を見た。

「あれ？陽立くん。」

その声はあまりにも幼く感じる。

でも、その声を出しているのは、陽立のクラスの担任、ふるばやしさえ古林紗枝だ  
った。

今年でもう34歳になるというのに、とても幼げない教師だ。

「…古林センセですか…」  
小さく言って、古林の横を通り過ぎようとしたそのとき…

「ああ待って、陽立くん。キミまだ、わたしが渡した宿題のプリント、終わらせてないでしょ？」  
…なんてヒトだ。

こんなゲームに巻き込まれていても、頭の中は勉強なのか。

「今日は持つてきてません。」

「もっつ！美富ちゃんといい、佐々木くんといい、キミといい…。ちゃんと勉強しないと、大人になって苦労するよっ？」

幼い声を出す人が、よくいっぱしの大人のようなことを言うよなあ…。

「大丈夫ですよ。俺、頭は良いですから。」  
陽立は人差し指で頭を指差した。

それに古林はハアツとため息をついて

「頭がよくても、ちゃんと授業には出席しなさい……!!」  
その声が陽立の耳に割れるように響いたので、陽立は逃げるように階段を上がっていった。

「あ、ちよっとっ！陽立くんっっ???!」

いまはこのヒトのくだらん説教に付き合ってる暇はあらんのか……。

陽立は足を大きく前に進めていった。

プログラム：18    〈僕は 何もしてあげられなかった〉

「ゆうちゃん、どこに行こうとしてるの？」

静香は甘えた口調で、隣りで歩いている結城に話し掛けた。

「・・・」

結城はさっきから黙りっぱなしで、学校の地図に目を光らせている。

「ゆうちゃんっ！ー！！」

静香の聴いたことのない大きな声に、結城はハッと驚いた。

「え、あ、ど、どうした？静香：。」

冷や汗をかきながら、結城は静香に聞いた。

「どこに行こうとしてるのって聞いているのっ！ー！！」

静香はまるでヒステリックにでもなったかのように怒鳴りながら結城に叫んだ。

「か、隠れ場所を探しているんだ…！」

結城は静香の声に圧倒されながらも言った。

「…そう。」

そこでまた沈黙が続いた。

「…ゆうちゃん、ゆうちゃんは悪魔を信じる??」

この質問だけは、今度は結城にはきちんと聞こえていた。

「…ど、どうしたんだ？静香が悪魔なんて言葉を言うなんて…。」

悪魔を信じる??

そんな質問、初めて聞いた。

信じるも信じないも、あの出来事をこの目で見てしまったのだ。

信じない、といったら嘘になる。

「…信じない、って言ったら嘘になる。」

その言葉に、静香はパアツと顔を明るくした。

「…そうっ…!」

結城はボソリと呟いた。

「…なんだかいまの静香、静香じゃないみたいだ…。」  
その声に、静香は肩がピクリと動いた。

「…どこが?」

静香は結城だけに聞こえるように言った。

「…ど、どこがって…。」

いつもの静香は怒鳴り声を上げないし、変な質問もしないじゃないか。」

結城のいい終わる前に、静香はポツリポツリと笑った。

「…フ、フフフ…フフフツ…。」

静香の状態がおかしくなったことに結城は気がついた。

「しず、か…???!」



「フッフツ……！！ハハハハハハッツ！！！！！！！！！！」

結城の声を耳に入らず、静香は狂ったように笑い叫びだした。

「ハハハハハハッツッ……!! ワタシハ鬼。見ツカツテシマッタ鬼。アト残りノ鬼ハ、14体ツツツッ!!!!!!」

静香でなくなつた生き物は、そう叫び、ボウツと燃えた。

それは、坂野の燃えた燃え方と、同じだった…。



「…え？しず、か…？？」

今の出来事を信じられない結城は、その場にポカんと立ち尽くしているしかできなかった……。

プログラム：18    〈僕は 何もしてあげられなかった〉（後書き）

結城はもう、悲しみしか残っていないのだろうか・・・。

悪魔はいつたい、何がしたいのだろうか・・・。

プログラム：19    〈呪いのような声〉

アレは僕を許さなかった。

だから僕はこうなってしまった。

望んでなどいなかった薄気味悪いモノになった。

でも、こうなった僕を、アレは許してくれたのかな。

僕が僕自身を苦しめればいいんだろう？

そんなの、ずっと昔からやっていたのに。

もっと僕に苦しめとっているんだね？

酷い…憎い…。

アレは僕を許さなかった。

だから僕はこうなった。

嗚呼、アレは僕がこうなることを知っていたと思う？

僕でさえ知らなかったのに。

なんで他人が僕の未来を知っていなきゃいけない。

許して。

何度だって謝るから。





んなさい、ごめんなさい…。

許して。

僕は元に戻りたい。

ボクたちは、シンユウ

ダツタデシヨ??

プログラム：20 ヘダメダヨ。僕ハマダ、ミツカツチャダメナンダ

ねえ、君は僕を許してくれる??

僕が裏切ることを、君は許せる???

僕が信用しないことを、君は許せる???

僕が泣かないことを、君は許せる???

僕が憎むことを、君は許せる???

僕が狂っても、君は許セル?????

憎悪の塊は僕に食らいついた。

僕は僕だけど、僕でなくなった。

じゃあ誰???

僕は、誰???

君は、どうして許してくれないの???

親友の皮をかぶった、この僕を……。



ねえねえ、君の憎しみは、とても僕を感動させたよ！！

君の親友を無くしたその気持ち、僕にはとても気分がいいッッッ！



!!!!

辛いでしょう？悲しいでしょう？？？

いい気持ちでしょう？

ねえ、答えてよ。

そんな怖い顔しないでさ。



結城クン

ええ〜????

なんで僕が《悪魔》なのかって？

君に言う必要はないよう〜。

だってゲーム開始前に僕を見つけてちゃった君は、

もう死んじゃうんだもん



プログラム：20 ヘダメダヨ。僕ハマダ、ミツカツチャダメナンダ（後書き

更新するのが、また遅れるかと思っています。

すいません。

b y 偽屋

プログラム：21    〈悪魔様    何ヲ御望ミデスカ？？？〉    (前書き)

更新が遅れてすみませんでした。

この後もまた、更新することが多くなると思いますので、あらかじめご了承ください。

b y 偽屋



プログラム：21    〈悪魔様    何ヲ御望ミデスカ????〉

只今の時刻 10：45。

ゲーム開始時刻まで、残り約1時間。

「俺さあゝ勝つ自信まったくないんだよね。」

尚人は、探す場所を必死で見つけようとしているノゾムとノゾミに言った。

「…は？何を今更…。」

ノゾムは尚人のほうに目を丸めた。

「だって相手は悪魔なんだぜ？勝てるわけがないじゃん？」  
尚人はもう諦めかけていた。

「それに、こんな学校に隠れる場所なんて…オタクキ〜ぐらいしか知らないだろ？」

「どこに学校の隠れ場所を知っているオタクがいるのよ。」  
ノゾミは尚人の言っていることに興味を示さなく、素っ気無く突っ込んだ。

「まあさ、あれだよ。探したって隠れる場所なんてないんだからさ、もう諦めよーぜ。」

苦笑した尚人をノゾムは睨みつけ、ノゾミは前へ進んだ。

「な、なんだよっ……」

急に睨みつけられた尚人は、  
ノゾムにこくりと唾を飲み込みながら言った。

するとノゾムは、ふちの無い長方形の眼鏡を軽く上げた。

「別に尚人が諦めているなら、尚人は諦めればいい。  
僕らは残念だけど、尚人とは違う考えみたいだね。」  
そう言って、ノゾムもさっさとノゾミのところまで歩いて行ってしまった。

「…っんだよ…!!」

きっぱりとノゾムに言われ、

尚人はイライラしたまま、ノゾムたちの反対方向へ歩いていった。



嗚呼…

このゲームはみんなを引き裂いてしまうんだね。

僕はただ、信賴している強さがどれだけか、知リたかつたのに…。

早い。早い。

そんなにもろいものなんだ。

簡単にユウジヨウというものがバラバラになった…。

人間は所詮、自分だけしか見れないんだね。

でも悪魔は特別だよ。

特別すぎて気持ち悪い。

悪魔はトモダチを知らないから。

ユウジヨウを知りたいから。

ダカラ自分の欲望のために、  
生き物を殺して、そして何かを得ろうとする。

何も得ることなんて、できるはずが無いのに。

ねえ悪魔、今度ハナニガ、

御望ミデスカ?????





プログラム：22 《ジュバク》

早く終わりたい。

こんなゲームなんて、いらない。

やりたくも無かった。

何でこんな下らないものに参加させられるの…？

ああ、わたしは、早く家に帰らないといけないんだ。

そうよ。

帰ってピアノのお稽古もしなくちゃいけないし、  
バイオリンの稽古だって…。

塾の宿題も、あれは確か、  
ワークを2冊やってくるのよね。

それなら一日で大丈夫。

わたしなら、一日で終わる。

わたしであれば、の話。

いまのわたしはまるで別人。

優等生でいたわたしはどこに行ったの??

黒の中に閉じ込められているの。

ただ自分の叫ぶような鳴き声だけが響きわたっているの。

わたし、こんなに泣いたことってあったのかしら。

わたしの何もかもがいつも縛られていて…

スケジュールも、わたしのプライバシーも。

恋はするな、勉強だけに集中しろ。

まるでわたしはロボットだ。

縛られているばかりで、何も反抗せずこなしていた。

わたしはいつたいなんなの？

人間じゃないみたい。

ロボットね、ほんとう。

カタカタしていて、動き辛い体。

脳だって、埋め込まれたことにしか働きやしない。

他のことは何もおしえてこられなかったから。

トモダチのことも、恋のことも。



まだ泣いている。

いつになったら泣き止んでくれるの？

わたしが強くなったら？？

なれるわけ無いじゃない。

だってもうわたしは



ロボットナンダモノ・・・。

エ？

ワタシヲ自由ニシテクレルノ？？

アナタハ誰？？？

『悪魔』？

変ワツタ名前ネ。

鬼???

アア、アノ隠レ鬼ノコト…。

アナタガ『悪魔』

ナノデスネ??????

ワタシハ悪魔ヲ拒ムコトハシナイ。

ダツテ、

ワタシハ自由ニ

ナレルノダモノ……。

プログラム：23 へ始まったヨ 悪魔のゲームが へ

只今の時刻 12：00 .

ゲーム開始 . . . . .。

『ゴオオオオオオオオオオ . . . . .』

学校中に響き渡った鈍い音。

それは‘ゲーム’の開始を意味する・・・。

さあ誰が、悪魔を見つける？

悪魔は待ってます。

大切だった‘アノ人’に見つけてもらうことを。

悪魔は怒っています。

大切なものが、ゲーム開始前に自分を見つけてしまったことを。

悪魔、悪魔、アナタはいつたい、ナニヲ望ンデイルノデスカ・・??

絶望ですか？

惨殺ですか？

失望ですか？

それとも、

かすかな光を、望んでいるのですか?????





ハジマッタ。

トテモ可哀想ナゲームガ

ハジマッタヨウ・・・。

見ツケテ。

ボクヲ。

早く見ツケテ。

賞品ハナイケド、罰ゲームナラ、

タクサンアルカラ

ボクハ短気ダカラ、早く見ツケテクレナイト、

怒ッテ全員焼キ殺シチャウカモシレナイヨ・・・???

ボクハ優シクナイヨ。

寧<sup>ムシ</sup>口無残ナホウダカラ。

救イナンテ、コノ世ニハナインダ。

ボクハ悪魔。

全テハ、人ヲ落トス狂イノ道具。

始マリハ、終ワリデモアル。

生キテイラレルカナンテ、ボクニモワカラナイヨ。

ネエ、モシ生キテイタラ、

ボクノ救イニ、ナツテクレナイカナ・・・・・・・・・・・・・・？？

?  
?

プログラム：24    〈僕らは一人じゃないよ〉

『ゴオオオオン・・・・・・・・。。』  
『

軋むような鐘の音が、スピーカーから流れた。

これが、きっとゲーム開始の合図なのだ。  
皆は・・・・隠れ場所を探せたのかな・・・・。

あたしは、そんな不安と心配を頭に浮かばせながら、目を閉じた。

「ねえ奏・・・。」

少しして親友のかけて来た声に、あたしは重い瞼を開けた。

「ん？なあに？」

なるべく心配をかけさせないように気を使って、あたしは聞いた。

「…私たち、鬼に見つかって殺されちゃうのかな・・・。」

由樹は青ざめた顔を、あたしに向けた。その顔を、あたしはまともに見ることは出来なかった。



「・・・・・・・・。そんなことない。こんなところ、誰も気がつかないよッ!!」

出来るだけ精一杯な笑顔を見せて、由樹を安心させようとした。

でも由樹は、あたしのそんな気づかいにちっとも気が付いてくれなかった。

「・・・・・・・・私、私死にたくない・・・・・・・・死にたくないよっ・・・・・・・・!!」  
由樹の瞳は、今にも雫が零れそうで、とても怖かった。

その雫を見ると、あたしは何も言えなくなってしまった。

「・・・・・・・・大丈夫、きっと勝てる・・・・・・・・。」そう呟いて、私は雅之の顔を伺った。

雅之は目を瞑っている。

そして、うなされている。

「・・・雅之？」

雅之は目をあけた。

目を開けるまでに、かなり時間がかかったと思う。

「・・・あ、奏、どうしたの？」

雅之は目を擦ってあたしに聞いてきた。

「うなされてたよ。」

小さく言う。雅之は深くため息をついた。

「そつか。嫌だなあ、こんなときになされるなんて。縁起でもない。」

そう言って苦笑していた。

「ほんと!」

あたしも苦笑して雅之を見つめた。

雅之の心配は自分自身への無理でもある、縛りでもある。

それはあたしだって一緒だ。

でもそれを、お互いに気付き合えている。

それはそれでなんだか特別だと、あたしはかすかに思っていた。

ねえ悪魔、あたしたちは、あたしたちはね。

あなたとは違うんだ。

当たり前だろうケド、あなたはあたしたちを見縊<sup>みくひ</sup>り過ぎたみたいだよ。

悪魔、あたしたちは【独<sup>ヒトリ</sup>】ではないんだ。

信頼できる人が、優しく受け止めてくれる仲間が、傍にいるから。

それが、それが裏切りとなるなんて、

このときは誰も思いもしなかった、けれどね・・・。

プログラム：25    へ無理だよ、今の君になにができる？へ

「抹、てめえもつと速く歩けねえのかよっつ！……！」

美富は声を張り上げて佐々木に向かって怒鳴った。

「……ああ、ごめん。」

佐々木はそれだけ言うつと、またノロノロと歩いた。

「っ！何だよお前、ビビッてんのか？！いい加減にしろよ、陽立は一人で隠れてるに決まってるだろ？！今は自分の心配したらどうなんだよっ！……！」

佐々木は先ほどから、一番最初に教室を出て行った陽立を心配していた。

それが凶星だったのかは謎だが、佐々木は言った。

「別に、そんなことはない。柳田、お前、よくこんな状況でも怒ってられるな。少しは冷静になっただろうなんだ。」

「・・・あ・・・？」

その言葉が気に食わなく、美富はギロツと佐々木を睨みつけ、その胸倉を掴んだ。

「てめえよおお！！この状況で冷静になれるとでもおもってんのか？？！俺は生憎、そんな良い機能は備わっていないもんでねッ！！！！怒り狂うことしか出来ねえんだよっ！！！！！！！！！！」

最後の言葉が言い終わらないうちに、美富はバツと佐々木の目に見えなくなるまで走って行ってしまった。

佐々木は、美富をとめることはしなかった。

だって、

出来ないのだから・・・。





当時中学一年だったときの俺は、今では自分でも信じられないほど凶悪だった。

そりゃ暴行なんて当たり前。

盗みだつてしたし、警察のお世話にだつてなっていた。

どうして、俺はいま、こんなに平和ボケているんだろう。

・ ・ ・ ああ、そうだ。

‘アイツ’のせいなんだ ・ ・ ・ 。

プログラム：26 「俺ができること」

「ドンッ！」

二学年上のやつと、肩がぶつかった。

俺は直ぐに肩を掴まれた。

「おいコラてめえ、肩がぶつかったっつーのに、無視すんのか？」  
それに俺はどうしたと思う？

もちろん、半殺し。

俺、そんなに強かったんだな。

何で今は、こんなにも何も出来ないクズなんだろう。

まあ、原因は‘アイツ’にあるのは確かだ。



「なあなあ、お前、強いんだろ？俺と拳でやり合ってくれないか？」  
「アイツ」は俺に、いきなりそう言った。

「俺は、おまえみてえな女とは喧嘩はしねえんだよ。」

「女だからって、あまくみんなよ！それとも、俺とやり合うのが怖いのか？」

その挑発的な言葉は、相手をその気にさせてしまう。俺はまんまと引つかかった。

「腕が折れたって、しらねえぞ。」  
俺はにらんだ。相手もにらんだ。

睨み合った俺らの結末？

いいたくも無いね、そんなこと。

答えは、俺の負けってことさ。

いい気味だってか？別に良い。

もう、今となってはもうだって良い。

本当に。

本当に・・・どうだっていい・・・。



「・・・お前、なんでそんなに強いんだ。」  
喧嘩負けなしだった俺に、‘アイツ’は敗北を与えた。

どうしてだ？なんで、俺がはじめて、

オンナニマケタ??

そいつから返って来た言葉はたった一言。

「強くなりたいから。」

「俺はさ、強くなりたいんだ。俺、すっげえ短気だろ？だから友達も何にもできなくて。悔しいんだよ。そうゆう自分。だから強くなつて、誰かを助けられるようなやつになりたいって思ってるんだ。そのためには、強いやつと戦って、そして勝って、負けて……。それを繰り返していけば、俺はきっと強くなれるような気がするんだ。」

馬鹿らしかった。それと同時に、何かが悔しく感じた。

「なあ、抹。お前、俺のことを必要だと思ったことってあるか？」

「……ないね。」

「……。だよな。だからさ、必要にされる存在になりたいから、誰かを助けてやりたいから、俺は、強くなりたいんだ。そんな理由でやり合ったら、いけないのか？」

「アイツ」は聞いてきた。俺は素直に言った。

「女がそんな危ないことしたら、いけねえに決まってる。」

「あつそ。じゃあお前も止めろよ。喧嘩。」

最後の単語に、俺はピクリとした。

「は？なに言ってるんだよ。」

「俺は喧嘩はそんなしないようにする。だから、お前は喧嘩止めろ。」

「なんでそうなるんだよっ！」

「俺に負けたくせに、よくゆーよな。」

「ぐっ！」

「とにかく、お前は俺の隣りで支えてくれば良いんだよ。俺は、お前を必要としてるんだからな。」

最後の言葉には、俺には聞こえなかった。

「は？いまなんて・・・。」

「あ？何も言ってるええよ。」

そう、‘アイツ’は誤魔化して、そして笑っていた。



ムカツクヤローだった。一言でな。

俺も、ホント女々しいぐらい大人しくなっ  
たもんだぜ。  
情けないね。

過去の俺が、現在の俺をさすように言ってくる。

お前は、何もしないでただじっと、時間が流れるのを待っているのか？

そんなんで、‘アイツ’が俺を必要としてくれるとも思ってるのか？

何も出来ないくせに、お前は、何をするために、‘アイツ’の傍にいつもいたんだ？

その言葉は、氷のように冷たい。

俺は俺を苦しめる。

でも、痛いという感覚は無かった。

ただ一つ、悔しいという感情だけが、その言葉に込められていた。

俺は何も言わず一回だけ首を縦に振る。

過去の俺は、現在の俺の思ったことがわかってくれたように、姿を消していった。



何をするために？

もう、その答えは自分自身で知っていたはずだ。

あとは、それを成し遂げるだけだろう？

佐々木は、美富が走っていった、あの跡形も無い廊下を、追うように走り去っていった・・・。

プログラム：27    〈キミたちがいたか　ラ〉

ふざけんな・・・。

俺だって、諦めたくは無いんだよ・・・！

モヤモヤした気持ちを抱えて、尚人は階段に座っていた。

あれからノゾムたちのところに戻ろうか考えたが、やはり戻ることが出来なかった。

いいんだよ。あいつらんどこ行けば、今度こそ俺は邪魔もんな

る。

尚人はふてくされたように、慌てふためいて逃げ回る教師たちや生徒達を横目で追っていた。

俺は、あいつらと出会えただけで良かったんだ。

「ハアー……。」「深くため息をついて、うなだれた。

ちよーこえーよ……。

尚人はあくまでも声には出さず、ただじっと、時が経つのを待っていた。

早くこんなゲーム終わって、またあいつらと学校に行かなくちな．．．。

あいつらだつて、きっとこんなゲームが終われば、俺のところに戻ってきてくれるはずだ。

．．．絶対．．．に．．．。

「ねえ、その髪の毛、染めてんの？ちょーキンキラじゃん。」  
一人の男子が言った。大体三、四年生ぐらいの奴だ。

「ううん。地毛だよ。」

素直な相手は、そう答えた。その子も三年、四年ぐらいだ。

「げっ、お前もとからこうゆう髪なのかよ。きもちわりー！」  
そう言つと、その男子は走っていった。

相手は、何も言わずその男子を見つめて、自分の髪の毛を触った。

金髪っぽくてなにが悪い、とでもいいかげな表情だ。

周りの人たちは、みんな黒とか茶色。

その子の髪の毛はとても目立った。

それと同時に、彼はみんなの輪から外されていた。

「ねえ、あそぼ・・・」

ボールをもっていたその子の肩を、一人の男子が突き飛ばした。

「うるせーよキンパツ！」

「怖くない？あの髪の毛。」

「顔も超怖いしねー。」

みんなの悪口を聞きながら、その子の持っていたボールは床に落ちていった。

なんだよ。

そんなに俺が凶悪にでも見えたのか？

ふざけんなよ。

俺は別に悪いことはしてないだろ？

その子はどうとう、誰とも話さなくなっていた。

髪の毛だって、そのままにしておいた。



染めようと思った。

でも、今ごろ染めたって遅いと思ったんだ。

プログラム：28 《今回だけだぞ 二度目はねえからな》

その子が中学に上がるその日、二人の男女に出会った。

その子が中学に入って、誰とも接しなくなったところだ。

その子が図書室で静かに本を読んでいて、その子の周りには一人も人が近寄っていなかった。

「隣り、良い？」

その子のとなりに一人の男の子が座った。

男の子の隣に、その男の子と同じ顔の女の子が座った。

二人とも眼鏡をしている。

双子だ。その子はそう思った。

自分みたいな目立つものが近くにいては悪いと思い、席を立とうとした。

すると、女の子が聞いた。

「あら、行っちゃうの？」

その声に、その子は言い返す。

「俺みたいなのやつが近くにいないほうがいいだろ？」

男の子が一言言った。

「静かで良い。」

それに、その子は黙って、またその席に座って、大きな本で自分の顔を覆った。

いつの間にか流れてきた涙を、見せないように。

「ノゾム、図書室行こうぜ！」

その子は元気になっていた。

前までの彼とは、かなりの違いだ。

「もちろん。一日に三回は行かなきゃいけないからね。」

「なっがつ！」その子は突っ込む。

「私は五回。」女の子は冷静に言う。

「いや、だからながいってっ！」

その子たちは笑っていた。

その子は、“居場所”を見つけることが出来たらしい。

凄く嬉しそうだった。

“その子”は目を開けた。

いつの間にか、俺は眠っていたらしい。

階段で居眠りかよ。かっこわるい。

尚人は階段から移動しようと、立ち上がった。

「あ、尚人。」声が聞こえた。ノゾムの声だった。

尚人は少し機嫌ナナメのように振舞おうとして、ノゾムの声にした方に目だけを動かした。

しかし、いつの間にか顔ごと声のほうへ向いていて、口が開いた。

「だ、誰だよ……お前……？」尚人は驚いた。

「え？なにいつてんの？」  
その声は確かにノゾムだ。

しかし、『その姿』は、ノゾムたちのものではなかった。

「な、んでノゾムの声を……。」「  
尚人は後退く。身体が妙に震える。

「……僕は、ノゾムじゃないか。」「

「ち、ちがうつ！お前は、ノゾムじゃない！」「

尚人は、自分の方によってくるノゾムたちから、一生懸命逃げようとしていた。しかし、

「……ナオト……僕ハ……ノゾムダヨオオオオオオオオオ  
?????!?!?!?!?!」

?!なんだっ?!

尚人は動揺を隠し切れない。誰なんだ、こいつは?!鬼か？鬼なのか?!

「お前は、鬼なのか?!」

「ち、ツガウ……!!僕ハノゾム。キミヲ殺シニキテヤッタンジ

ヤナイカ！！！ナオトツツ！！！！！！！！！！」

よく見ると、自称ノゾムの右手には、鉈が強く握り締められていた。

どうして？！

ノゾムは急いで階段を駆け上がっていった。

こんなところで・・・殺されたくないっつ！！！！

「わあああああー！！」

目を強くつぶって、走れるだけ走っていった。

ノゾムでもないのに・・・。



どうして・・・ノゾムの声が・・・？

後ろは振り返りたくなかった。

だって、スグ後ロニルカモシレナイカラ・・・

「あああー!-!-!」

声ばかり出して、足には全く力が入らない・・・。

どうしよう・・・!-!-!

そう焦っていると、あいつらにあった。

「・・・！なお、と？なにしてるんだ、そんな声出して・・・」  
こいつは、本物だ・・・。  
尚人は多少ホツとした。しかし、すぐに我に返った。

「逃げろっ！！鬼だ、あれは鬼だっっ！！！」

「鬼?!」ノゾミの顔が青ざめる。

「よ、よし、行こう、ノゾミ、尚人！」

ノゾミが尚人の名前を呼んでくれた。でも尚人は、それに甘えようとはしなかった。

「嫌だ。俺は、お前らなんかとは行かない。」

「・・・は？なにを言い出すんだ？」ノゾミは目をパツチリと開ける。

「お前らがいると足手まといになるからな。俺は一人で行動するぜ。」

それに、ノゾミはカチンと来た。

「・・・なら、一人で行動すれば良いさ。僕らは、先行くよ。行こ、

ノゾミ。」

ノゾミはノゾミを呼んで、さっさと行ってしまった。尚人は、唾を  
ごくりと飲み込んだ。

「・・・まいったな・・・。」

尚人は、廊下の壁に背中を当て、崩れ落ちるように床に座った。

「・・・俺のほぅが足手まといになるじゃん・・・。」背中から変  
な汗が吹き出ていても、もう尚人は気にしなかった。

「さあて、少しは、足止めになんだろ。俺だって、やるときはやる  
男なのさ。」

そう言つと、また立ち上がった。

そして、『その姿』は現れた。

「ミツケタ……。僕と一緒に死ノウ？ナオト……。」

『その姿』は、床のタイルを鉋でギーギー音をだしながら、傷つける。

「嫌だね。偽者ノゾムとは、死にたくない！」  
アツカンベーと尚人は、『その姿』を挑発した。

「ソツカ……。ジャアナオト、僕ノタメニ……。死ンデ！」

「……。ごめん……。ノゾム、ノゾ、ミ……。。」

そう呟くと、『その姿』は、尚人の真上に鉋を振り下ろした……。



プログラム：29    〈嗚呼…また借りを、つくってしまったね〉

《ポタ・・・ビシャ・・・ポタツ、ポタ・・・》

壁に、鉦が振り下ろされた。

その姿は赤い涙を流している。

尚人は、まだ生きていた。

なんで？

あれは、

絶対に当たるはずだった。

どうして・・・？

「・・・え？」

尚人は目を見開いてしまった。

だって、尚人の瞳には・・・。

「・・・尚人のバァ力。」

「・・・尚人のやることは目に見えてんの・・・。」



「ノゾム・・・ノゾミ・・・？」

二人が立っていた。

しかもノゾムのほうは、右腕が無くなっており、

血が溢れ出している。

「ノゾム・・・腕が・・・。」

震える身体を必死に抑えようとするが、

尚人は床に落ちていたノゾムの右腕を見てしまった。

「ノゾム・・・?!?」

ノゾムは尚人のほうを振り返った。

「尚人は本当に、嘘をつくのが苦手なんだね。」  
その顔は僅かに青ざめていたが、ノゾムは精一杯笑いを浮かべていた。

「ノゾム、そんなことより、腕、が・・・」

ガタガタ震える身体を、尚人は抑えきることが出来なかった。

「・・・ああ、うん。痛い。」

無理してノゾムは笑う。

いつの間にか、その姿はスッと姿を消していた。

「止血・・・止血しなきゃ・・・」

とりあえずホツとしたものの、ノゾムの肩から吹き出る血は、とても恐ろしかった。

「近くの教室に隠れましょう。そこに救急箱があると思う。応急処置ぐらいにはなるでしょう……。」

ノゾムの代わりにノゾミが指示をテキパキ出すが、足は微かに震えていた。

「……ノゾム、何で、戻ってきたんだよ。」

尚人は唇をかみ締め、苦しそうなノゾムの顔を窺う。

「……………尚人のことだから、また無茶するんだろうと思ってね……………」

腕はまだつながっていない。

当たり前だ。

救急箱に入っていた包帯を巻いただけなのだから。

「……………戻ってみたら案の定、変なやつに襲われてるあんたがいてね、ノゾムったら後先考えずにむやみに突っ込んで行っちゃって。腕をちよん切られた。」

「……………人事みたいによく言っよ。」

「・・・ノゾムの痛さは、悲しいほど凄く伝わってくる・・・。」

ノゾムとノゾミはお互いを見つめて、ぎゅっと手を握った。



プログラム：30 《ボクニ黒い血が流レルヨウニ》

「ねえ、いま何時かな……。」

隣りにいる由樹に、あたしは聞く。

ここに時計があるようには思えない。

あったとしても、きっと狂ってる。

「……もう、ゲームが開始してから2時間たってる……。いつ

まで隠れていればいいの？まさか、悪魔を見つけるまで？！」

由樹は腕時計で時間を確認して、肩を震わす。

「・・・わかんない。」

あたしは、安心させる言葉を伝えることが出来ない。

一緒に震えるしか、出来ない・・・。

「・・・そろそろ、出ようか。」  
雅之が呟く。



あたしと由樹は目を開く。

「え．．．?!」

まさか、雅之がそんなことを言うなんて．．．。

「春人が来ない。鬼に見つかったのかもしれない．．．。それに俺らだって、ずっとここに居てもしょうがないじゃないか。」

「それは．．．そうだけど．．．。」

「俺達で、悪魔を見つけてやろうぜ!」

雅之は精一杯の笑みを見せる。

そんなことされると、

断れない。

「・・・うん、そうだね・・・。」

「奏?!」

由樹はオドオドとしながらあたしの服の裾をつかむ。

「大丈夫だよ由樹。一緒に悪魔を見つけて、早くこんなゲームを止めさせよう?」

「・・・・・・うん・・・。」

由樹は相変わらず青ざめている。

あたしは、これ以上何も言えなかったけど、

由樹の手を、ヒシツと握っていた。

ア、動き出した。

ゲームの駒が、やっと動き出した。

見つけてごらん。

この僕を。

僕は紅黒い駒で、キミ達は真っ白の駒だよ

プログラム・31   《ムシャクシャしてしょうがない…》

あいつはどこに行った？

そんな遠くに行ってるはずがないのに・・・。

廊下をいくら走っても、あいつの姿なんて見えやしない・・・。

クソッ！！

俺は廊下を蹴るように突き進んでいく。

階段を上がって、何回も何回も行ったり来たりする。

あいつの姿は、それから5分ぐらいしてからやっと見つけられた。

「柳田！」俺はあいつの名前を呼ぶ。

でも、あいつから声が返ってくることは無い。

どうして？

「柳田！！」

もう一度呼んで、あいつの近くに駆け寄る。

そこは教室だ。

真ん中のギシギシいう教室。



真っ黒なカーテンが光をさえぎり、そこは真っ暗で、全てが違ってしまう。見える。

「・・・あ・・・？」

違う。

これは、柳田じゃない・・・！！

気付いたときには遅かった。

俺は、後ろから誰かに襲われる。

「！！！？」

幸い、刃物を刺されたような感覚はなかった。

「誰だよっ!!」

思い切って後ろを振り返ると、そこには

「あ、ごめんなさい佐々木くん！わたし・・・てつきり鬼かと思つて・・・。」

古林先生だった・・・。

「せ、先生？・・・お、俺こそすいませんでした・・・。」

俺は後ろに身を退きながら、軽く謝った。

先生は微笑する。

「ごめんね、わたし、このゲームが怖くて……つい……。」

先生はオドオドしながら俺に話す。

「い、いえ、怖いのはあたりまえっすよ。こんなのに巻き込まれたら誰だって。」

俺は苦笑して、急いでその場から立ち去ろうとした。

しかし

「……どこ行くの、佐々木くん?。」

先生に止められた。

「・・・柳田を・・・探しに行くんです。」

俺は正直に答える。

すると、先生は首をかしげる。

「美富ちゃんを？　そういえば、一緒じゃなかったのね。」

「え、ええ・・・。」

俺はあくまでも苦笑だ。

苦手なんだよなあ・・・。

この人・・・。

「・・・ねえ、佐々木くん。」

先生は笑う。

「ハイ・・・？」

そのとたん、俺の首筋に冷たい感覚が走った・・・。

プログラム：32 《これは必然だ》

いま、どこら辺を走っているんだろう・・・。

雅之の足が速すぎて、付いていけそうにない。

由樹のペースにあわせるあたしと雅之の間は、2 mぐらい開いてしまっていた。

そして次の曲がり道、あいつに会った。

「わっ!!」

雅之は尻餅をつく。

そして相手も尻餅をついてようで、怒鳴ってきた。

「どこ見てあるいとなねんツッ!!前見て歩き・・・雅之?!」

そいつは陽立だ。雅之を見て驚いている。

「あれ?祐介?」

雅之はポカンと陽立を見る。

陽立の目は光っている。

「雅之iiiiiiiiiiii! ! ! ! !」

ガシッと雅之に抱きついて陽立たちに、ようやく追いついたあたしたちは、思いつきり冷たい目で二人を見つめていた（と思う）

「・・・ゲ、坂浦に畑山・・・。」

陽立は雅之にしがみついていた手を離して、不機嫌そうにこちらを見る。

「なによ、ゲツて!」

あたしは睨む。

そう、こいつ・・・陽立の本性、それは・・・。



「邪魔もん来たら、そら言うわ！いいムードやったんに！！」

極度の雅之好きのホモ、だった。

人は見かけによらないとは、こういうことを言うんだよね。

雅之は勿論、他の皆だってそんなこと知らない。

何故か勘のいいあたしだけがわかってしまっている（本人から口止め中）

「いいムードになってたまるもんですか！！」

あたしと陽立は口喧嘩仲間（？）。

会えばどこだろうと口喧嘩になる。

「なんやと！？そらどついう意味やねん！！」

「そついう意味ですうゝ！」

由樹と雅之はポカンとあたしたちの口げんかを聞いている。

そこに、誰かが割り込んできた。

「喧嘩するほど仲が良いって言うのよねえ」

『うつわ！！』

古林先生だ！

あたしたちは声を合わせて驚く。

「二人とも、とっても仲がいいのねえ」

『全然良くないっつ！！』

声がそろってしまうのも、これまたムカつくぞ。

「そんな隠さなくたって良いのに」。感動の再開の途中で悪いんだけど、陽立くん借りてって良いかしら？」

感動の再開ってわけでもないんだけどね・・・。

「全然良いです！焼くなり煮るなりしてくださいっ！！」

あたしは陽立をズイツと押し出す。

「はあ？！焼くなり煮るなりってどういう意味だよ！！」

陽立は先生の前だろうと口調が荒い。

（まあ、いつものことなんだけどね。）

「・・・チツ・・・。で、先生、宿題なら持って来てないって、さつき言いましたよね？」

陽立は先生の方に向き直って、何かを確かめるような感じで聞いた。

「やだぁゝなに言ってるの、陽立くん！宿題だなんて、こんなときに・・・！」

先生はそう笑って、陽立を掴んで行ってしまった。

プログラム：33 「冗談に聞こえないよ。怪しい匂いがする」

「・・・なんか、嫌な感じがする・・・。」

二人が見えなくなる前に、雅之がぼそりと言った。

「？嫌な感じ・・・？」

あたしが聞くと、雅之はこくりとうなずいて歩いた。

「付いていこう。陽立が心配だ。」

雅之が陽立を心配・・・？！

ある意味事件だ！！

「・・・話して、  
なんですか？古林センセ？」

いまわたし達がいるのは、陽立と先生がいる教室のすぐ隣り。

壁に耳を寄せて静かに身を潜めている。

「陽立くん、わたしね、やっぱり、そういうのって良くないと思うの！」

「・・・は？なにがですか・・・？」

陽立はサッパリ分かっていない様子で。

「だから、男の友情つてのも良いけど、今の時期は青春なのよ！」

「・・・センセ、熱でもあるんじゃないですか？」

同意権です、あたしも・・・。

「やあねえー熱なんてないわよ！陽立くんには青春が足りないのよ、青春が！」

「え、いや、まったくセンスの意見についていけないです。雅之ん  
とこに戻らせてもらって良いですか？」

「ほらあ、例えば坂浦サンとか！」

・・・先生・・・何故あたしの名前を出すんですか・・・。

「いや、それは絶対ありえないです！」

・・・いい言われようじゃねえかコラ（怒）

そのほうが嬉しいが・・・。



「・・・フフ・・・そういうところ・・・可愛げがあるのよねえ陽立くんは」

「・・・そういうアナタもですね、センセ。」

「・・・？まったく話についていけない・・・なにを話しているんだ？

「きみったら、ここはいつてからも誰にも甘えようとしないから、先生苛めたくなったりするのよう」

「・・・センセはSですか？俺はMになったつもりは無いですが。」

「あはは 嘘嘘 ・・・ ねえ ・・・ 陽立くん・・・」

急に・・・先生の声が低くなった気がした・・・。

「なんですか？」

陽立は動ずることなく聞く。

「・・・・・・・・赤は・・・・・・・・お好きかしら？」

え？

「  
．．．．．佐々木や美富を紅くしたように、  
俺も殺す気ですか？古林センセ．．．や、鬼サン？」

??!

古林先生が．．．鬼?!?!

あたしは肩が震えた。

雅之と由樹は目を見開いている。

「?!! なにを言ってるの・・・わたしが・・・鬼?そんなわけないじゃない!」

「なにを言ってるって・・・そんなの自分自身で分かってるはずじゃないですか。」

「佐々木や美富を騙せたとしても、俺はそう簡単に騙されませんよ。言っただけでしょう?」



「ワッ、タシハ鬼ッッ！！ミツカッタ鬼ッッ！！サア、残りハ・・・  
・・・・・アト何体デッシヨウ?????!」

そこで、『鬼』の言葉は消えていった。

「俺に優しくしたのが間違いでしたネ、センセ」



プログラム：34    「そう、それは、もう起きてしまったことだから」

「なんや、ついてきてたんか？」

あたしたちに気付いた陽立は、ひょこつと教室の隅から顔を出してきた。

まるで、何事もなかったように。

「・・・うん。心配になったから。」

雅之は無表情で応えると、陽立の目が潤み始めた。

「雅之！！俺のこと心配してくれたんかっ？！もー怖かったで、雅之、いいいいいい！！」

陽立は必死りと雅之に抱きつく。

雅之がなんも抵抗しないので、あたしが止めにかかった。

「あゝもーうつさいよ！雅之から離れろ！！変な誤解が生まれるでしょ？？！（つてか、ホモがばれるでしょ？！）」

あたしのカツコのなかの言葉が聞こえたからなのか、陽立はするつと雅之から手を引いた。



「・・・ってか、いつ古林先生が鬼だって気がついたの？」  
暫くして、あたしは恐る恐ると陽立に聞いた。

「・・・？見りゃ誰だって分かるやろ？」  
・・・陽立に聞いたあたしが馬鹿だった・・・。

こいつは本能では分かっているけど、自分自身はよく分かっていないだ。

勘がいい・・・って言うのかな・・・？

「おい、急に無言になるなよ。」

目を細め、眉を寄せる仕草が、とつてもムカムカ来るのは何故だろう・・・。

「いや、ある意味感心してただけだから、気にすんな。」

「ある意味ってなんや、ある意味で！」

「うつさいつての！クドイ男は嫌われるんだよ！！」

「なんやてー???！」

ふと気がついた。

「……………佐々木や美富を紅くしたように、俺も殺す気ですか?……………」

あんなに低くて暗い声、いつもの陽立の表情からは検討も付かなかった。

……………怖かった……………

あとき、陽立はいつたいどうゆう顔してたんだろ。

なんで、あんなに寂しく感じていたのに、すぐ笑っているんだろ・

無理・・・してるのかな・・・

あたしが、陽立に言うことじゃないんだろうけど、あたしだって、寂しい後に笑うことなんて・・・難しいよ・・・

でももし、もし陽立がいま誰にも分からないように、寂しいという思いに蓋をしているのだとするなら、あたしたちはそれを開けちゃいけないんだ。決して。

それに気付かないふりして、一緒に笑ってあげよう。  
安心させてあげようよ。

あたしたちは味方で、仲間で、大切なユウジヨウで繋がれてるに違いないから・・・。

プログラム：35    〈裏切れば、裏切るだけ…〉

暗い闇の中で、二つの声が混ざっては響いて消えている。

まるで影の世界にでも紛れ込んだようだ・・・

（なあ、俺は・・・二人を裏切らなきゃいけないのか・・・？）  
ひとつの声は、寂しそうに問う。

『勿論だよ。そのために君はここに呼ばれたんだ。』

問われた言葉を、軽く叩くように返す、もうひとつの声。

二つの会話は続く。

（嫌だよ……。俺……。あいつらを……。裏切るなんて……。出  
来ないよ……）

『何を言っているの？裏切ることなんて簡単じゃないか。君はただ、

正当防衛として彼らを見捨てればいいだけさ。』

（そ、そんな・・・）

『迷うことなんてないんだよ。彼らを裏切りさえすれば、君は生きていられるんだから。』

（お、俺だけ生きていられるなんて・・・）

『可哀想に・・・何が君を迷わせる？君がそんなに大切にしているもの・・・僕には分からないね・・・』

（俺が・・・大切にしているもの・・・？）

『いままでの子たちも、大切な人がいた。でも、その理性を殺してまで大切な人を裏切ったんだよ？』

（どうして・・・理性を殺してまで裏切らなきゃいけないんだ・・・）

『・・・どうして？簡単なことだよ。』

『楽しいからサ  
』

プツリ

最後の声と同時に、暗い闇の中には再び、静寂が戻っていた・・・。



プログラム：36 《悪魔の小言は天馬を縛る》

鬼サン鬼サン、役立たずだネ、キミ等

使えない奴らめ・・・

何でも簡単に見つかってしまっているんだい？

キミたちは、生きていたんだろう？？

なら、いつも通りにしていればいい。

呆気無く見つかって・・・馬鹿らしい。



折角僕が呼んであげたって言うのに。

どうして他人なんかを大切にするの？

大切なのは、いつだって自分ひとりだろう。

親友だから、仲間だから？

そんなの、口から出任せだ。

最終的には皆、自分だけが大切なんだよ。

キミたちはまだ、それを分かっていないんだ。

あと少ししたら分かるよ、キミらもきつと。

僕らは、頼れる人なんかいなくて、自分のみが大切なんだ・・・と。

まア鬼も、頑張ってるようだけどね。

一応始末はしてくれているし・・・。

あと数十分したら、人数は半分以上ぐらいにはなるだろう・・・。

クククッ・・・苦シインジャナイ？みんな・・・みんな、可哀相だね・・・。

嗚呼・・・ホント・・・可哀相・・・



プログラム：37

「本当のことを伝えるのは、お前らがすっげえ大切だからだ

「尚人、尚人？」

「・・・あ、え、なに？」

不意にかけられた言葉に焦りながらも、尚人はノゾムに聞いた。

「どうしたんだ？さっきから、黙り込んで・・・。」

ノゾムは、尚人の顔を窺うように心配している。

尚人は何も言えなかった。

「尚人・・・？」

「心配した眼で俺を見んなよ……。お前のほうが、危ないんだぜ。……こんなときに……。他人のことは気にすんじゃねえよ……。」

「？何言っているんだ、尚人。僕なんか全然大丈夫だよ。」

相変わらず、ノゾムは笑顔を尚人に向かって見せる。

無理しているのはバレバレだって言うのに。

右手が落ちないように、左手で支えているので精一杯なくせに。

ノゾムの額から流れてくる汗は、なかなか途絶えない。

「良いよ、無理すんなよ。ノゾム、痛いなら痛いって言えば……。死にそうなら死にそうだって言えば……。俺は、言ってくれなきやわかんねんだよ……。お前に手を貸すことができねんだよ……。」

尚人は、体育座りの態勢で身を沈めた。

ノゾムは黙ってうつむき、ノゾミは二人を真っ直ぐ見つめていた。

「・・・ハハ・・・何言ってるのさ。尚人、こんなので死ぬわけないだろ？僕は、僕は何も、感じないよ・・・？」

ノゾムのその笑顔が、不気味にさえ見えてきてしまう。

痛さのあまりに、何も感じなくなっただとも言っのだろうか。

怯えてる・・・ノゾムは、怯えているんだよ・・・。

本当に死にそうだから・・・。

ダメだよ・・・なんで・・・こんなときに俺、何も出来ないんだよ・・・。

こいつらを笑わせることさえできやしない。

だって俺は・・・俺は・・・

「ノ、ゾム・・・お願いがあるんだ・・・。」  
ノゾムは、顔を上げた。

青ざめた顔色を、俺は直視することが出来ない。

微かに視線をそらして、尚人は静かに言った。  
「俺は、あと少しで鬼に支配される。」



・  
・  
・    ただいま！お母さん！

おかえり、今日は早いのね。

うん！だってさ、今日はさ、奏の誕生日だもん！

うん、誕生日くらい、友達と遅く帰ってきてもいいのよ？

ううん！奏は早く帰れたかったの！お母さんとお父さんと一緒に、ケーキ食べるんだもん！

そうね、ケーキは奏の大好きないちごのケーキよ。

ほんと？！やったあ！！

・・・アレ？これ、いつのときの・・・？

思い出せないや・・・。なんか・・・鳥肌が立ってるのは・・・どうして？

。恐怖で寒気がするのか、懐かしくて涙が出るのか、わからない・・・。

なんで？どうして？

オナジ言葉が頭を巡る。

それは、あたしの頭を支配して、きっと、悲しみしか残さないのだ  
ろう・・・。

嗚呼・・・助けて。

あたしの、冷たい身体を支えてください・・・誰か・・・。



プログラム：39 〈大切だから、怪しく感じるの？〉

ギョッ・・・

「わっ！！？　なんや坂浦！！」

陽立が急に大声を出して、あたしは我に返った。

どうやら、陽立の服の裾を引っ張ってしまったようだ。

無理もない  
。

あんなこと思い出したら、誰かに縋りたくなる。

まあ、運悪くこいつに縋ってしまったただけ。

「あ、ごめん。」

パツと放し、素っ気無く返答すると、陽立はあたしの顔を覗き込んだ。

「おいお前、顔色悪いで？ちょっと休んだらどうや？」

「大丈夫ですよーだ。あんたに心配されなくても、休みたくなったら休むわよ！」

「な、なんやとっ？？！せっかく人が心配してやってるっちゅうに、それはないやろ！！？」

「だから、大丈夫だっていつてんでしょうがっ！！！」

「おい、二人とも。」

あたしと陽立の口げんかを、雅之が手で制した。

「そこで休もう。ずっと歩いてたって、きりがない。それに、体力には余裕を持っていたほうがいい。」  
そう言って、職員室を指差した。

いつの間にか、元の場所に戻ってきていたらしい。

あたしはうつむいて、陽立はフーンとしながら、職員室に入った。

「しつれいしまーす。」

職員室には、人はあまりいなかった。

みんな、どこかに行つたみたいに。

そして雅之は、目を大きくあけて、叫ぶように人の名を呼んだ。

「春人！！！」

名を呼ばれた本人は、こちらを見て、ホッとしたようにほほ笑んだ。

そんな彼に、雅之は駆け寄った。

「良かった、無事だったんだな……。」

雅之は春人の肩に手をおき、安心したように笑った。

「雅之の俺とあいつに対するあの態度の変わりよう、気にいらんなあ。」

一人ふてくされている奴は放って置くことにして、あたしたちはゆっくりと二人に駆け寄った。

「雅之……俺、俺……宮坂さんとはぐれちゃったんだ……。」

春人の顔が強張っている。

でも、雅之は落ち着いた様子で

「大丈夫だよ、宮坂さんならきつと、どこか安全なところに隠れるに決まってるさ」

あるわけもない事を述べていた。

宮坂さんは、普段の宮坂さんじゃない。

爆発状態の宮坂さんが、一人でどこかに隠れるなんて、不可能に近いだろう。

だめだ、雅之には今、春人しか見えていない。

周りの人が見えなくなるぐらいに、そいつが大切なの？

雅之・・・。



「春人、俺と一緒にいこう。一緒に、隠れる場所探して、隠れよう。」

あたしの知らない、雅之だった・・・。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3430d/>

---

悪魔の作ったゲーム

2010年10月27日10時03分発行